一夜

夏目漱石

「美くしき多くの人の、美くしき多くの夢を……」と髯ある人が二たび三たび微吟して、あとは思案の体である。灯に写る床柱にもたれたる直き背の、この時少しく前にかがんで、両手に抱く膝頭に険しき山が出来る。佳句を得て佳句を続ぎ能わざるを恨みてか、黒くゆるやかに引ける眉の下より安からぬ眼の色が光る。

「描けども成らず、描けども成らず」と椽に端居して天下晴れて胡坐かけるが繰り返す。兼ねて覚えたる禅語にて即興なれば間に合わすつもりか。剛き髪を五分に刈りて髯貯えぬ丸顔を傾けて「描けども、描けど

も、夢なれば、描けども、成りがたし」と高らかに誦(じゅ)し了(おわ)って、からからと笑いながら、室(へや)の中なる女を顧(かえり)みる。

竹籠(たけかご)に熱き光りを避けて、微(かす)かにともすランプを隔てて、右手に違い棚、前は緑り深き庭に向えるが女である。

「画家ならば絵にもしましょ。女ならば絹を枠(わく)に張って、縫いにとりましょ」と云いながら、白地の浴衣(ゆかた)に片足をそと崩(くず)せば、小豆皮(あずきがわ)の座布団(ざぶとん)を白き甲が滑(すべ)り落ちて、なまめかしからぬほどは艶(えん)なる居ずまいとなる。

「美しき多くの人の、美しき多くの夢を……」と膝抱(ひざいだ)

く男が再び吟じ出すあとにつけて「縫いにやとらん。縫いとらば誰に贈らん。贈らん誰に」と女は態（わざ）とらしからぬ様（さま）ながらちょと笑う。やがて朱塗の団扇（うちわ）の柄（え）にて、乱れかかる頬（ほお）の黒髪をうるさしとばかり払えば、柄（え）の先につけたる紫のふさが波を打って、緑り濃き香油の薫（かお）りの中に躍（おど）り入る。

「我に贈れ」と髯なき人が、すぐ言い添えてまたからからと笑う。女の頬には乳色の底から捕えがたき笑の渦（うず）が浮き上って、瞼（まぶた）にはさっと薄き紅（くれない）を溶（と）く。

「縫えばどんな色で」と髯あるは真面目（まじめ）にきく。

「絹買えば白き絹、糸買えば銀の糸、金の糸、消えな

んとする虹（にじ）の糸、夜と昼との界（さかい）なる夕暮の糸、恋の色、恨（うら）みの色は無論ありましょ」と女は眼をあげて床柱（とこばしら）の方を見る。愁（うれい）を溶（と）いて錬（ね）り上げし珠（たま）の、烈（はげ）しき火には堪（た）えぬほどに涼しい。愁の色は昔（むか）しから黒である。

隣へ通う路次（ろじ）を境に植え付けたる四五本の檜（ひのき）に雲を呼んで、今やんだ五月雨（さみだれ）がまたふり出す。丸顔の人はいつか布団（ふとん）を捨てて椽（えん）より両足をぶら下げている。「あの木立（こだち）は枝を卸（おろ）した事がないと見える。梅雨（つゆ）もだいぶ続いた。よう飽きもせずに降るの」と独（ひと）り言（ごと）のように言いながら、ふと思い出した体（てい）にて、吾（わ）が膝頭（ひざがしら）を丁々（ちょうちょう）と平手をたてに切って敲（たた）く。「脚気（かっけ）かな、脚気

かな」

残る二人は夢の詩か、詩の夢か、ちょと解しがたき話しの緒(いとぐち)をたぐる。

「女の夢は男の夢よりも美くしかろ」と男が云えば「せめて夢にでも美くしき国へ行かねば」とこの世は汚(けが)れたりと云える顔つきである。「世の中が古くなって、よごれたか」と聞けば「よごれました」と紈扇(がんせん)に軽(かろ)く玉肌(ぎょっき)を吹く。「古き壺(つぼ)には古き酒があるはず、味(あじわ)いたまえ」と男も鵞鳥(がちょう)の翼(はね)を畳(たた)んで紫檀(したん)の柄(え)をつけたる羽団扇(はうちわ)で膝のあたりを払う。「古き世に酔えるものなら嬉(うれ)しかろ」と女はどこまでもすねた体である。

この時「脚気かな、脚気かな」としきりにわが足を玩べる人、急に膝頭をうつ手を挙げて、叱と二人を制する。三人の声が一度に途切れる間をクーと鋭どき鳥が、檜の上枝を掠めて裏の禅寺の方へ抜ける。ククー。

「あの声がほととぎすか」と羽団扇を棄ててこれも椽側へ這い出す。見上げる軒端を斜めに黒い雨が顔にあたる。脚気を気にする男は、指を立てて坤の方をさして「あちらだ」と云う。鉄牛寺の本堂の上あたりでクー、ククー。

「一声でほととぎすだと覚る。二声で好い声だと思う

た」と再び床柱に倚(よ)りながら嬉しそうに云う。この髯男は杜鵑(ほととぎす)を生れて初めて聞いたと見える。「ひと目見てすぐ惚(ほ)れるのも、そんな事でしょか」と女が問をかける。別に恥(は)ずかしと云う気色(けしき)も見えぬ。五分刈(ごぶがり)は向き直って「あの声は胸がすくよだが、惚れたら胸は痞(つか)えるだろ。惚れぬ事。惚れぬ事……。どうも脚気らしい」と拇指(おやゆび)で向脛(むこうずね)へ力穴(ちからあな)をあけて見る。「九仞(きゅうじん)の上に一簣(いっき)を加える。加えぬと足らぬ、加えると危(あや)うい。思う人には逢(あ)わぬがましだろ」と羽団扇(はうちわ)がまた動く。「しかし鉄片が磁石に逢(お)うたら？」「はじめて逢うても会釈(えしゃく)はなかろ」と拇指の穴を逆(さか)に撫(な)でて澄ましている。

「見た事も聞いた事もないに、これだなと認識するのが不思議だ」と仔細らしく髯を撚る。「わしは歌麻呂のかいた美人を認識したが、なんと画を活かす工夫はなかろか」とまた女の方を向く。「私には――認識した御本人でなくては」と団扇のふさを繊い指に巻きつける。「夢にすれば、すぐに活きる」と例の髯が無造作に答える。「どうして？」「わしのはこうじゃ」と語り出そうとする時、蚊遣火が消えて、暗きに潜めるがっと出でて頸筋にあたりをちくと刺す。

「灰が湿っているのか知らん」と女が蚊遣筒を引き寄せて蓋をとると、赤い絹糸で括りつけた蚊遣灰が燻り

ながらふらふらと揺れる。東隣で琴（こと）と尺八を合せる音が紫陽花（あじさい）の茂みを洩（も）れて手にとるように聞え出す。すかして見ると明け放ちたる座敷の灯（ひ）さえちらちら見える。「どうかな」と一人が云うと「人並じゃ」と一人が答える。女ばかりは黙っている。

「わしのはこうじゃ」と話しがまた元へ返る。火をつけ直した蚊遣の煙が、筒に穿（うが）てる三つの穴を洩れて三つの煙となる。「今度はつきました」と女が云う。三つの煙りが蓋（ふた）の上に塊（かた）まって茶色の球（たま）が出来ると思うと、雨を帯びた風が颯（さっ）と来て吹き散らす。塊まらぬ間（うち）に吹かるるときには三つの煙りが三つの輪を描（えが）いて、

黒塗に蒔絵（まきえ）を散らした筒の周囲（まわり）を遶（めぐ）る。あるものは緩（ゆる）く、あるものは疾（と）く遶る。またある時は輪さえ描く隙（ひま）なきに乱れてしまう。「茶毘（だび）だ、茶毘だ」と丸顔の男は急に焼場の光景を思い出す。「蚊（か）の世界も楽じゃなかろ」と女は人間を蚊に比較する。元へ戻りかけた話しも蚊遣火と共に吹き散らされてしもうた。話しかけた男は別に語りつづけようともせぬ。世の中はすべてこれだと疾（と）うから知っている。

「御夢の物語りは」とややありて女が聞く。男は傍（かたわ）らにある羊皮（ようひ）の表紙に朱で書名を入れた詩集をとりあげて膝の上に置く。読みさした所に象牙（ぞうげ）を薄く削（けず）った

紙小刀（かみナイフ）が挟（はさ）んである。巻（かん）に余って長く外へ食（は）み出した所だけは細かい汗をかいている。指の尖（さき）で触（さわ）ると、ぬらりとあやしい字が出来る。「こう湿気（しけ）てはたまらん」と眉（まゆ）をひそめる。女も「じめじめする事」と片手に袂（たもと）の先を握って見て、「香（こう）でも焚（た）きましょか」と立つ。夢の話しはまた延びる。

　宣徳（せんとく）の香炉（こうろ）に紫檀（したん）の蓋があって、紫檀の蓋の真中には猿を彫（きざ）んだ青玉（せいぎょく）のつまみ手がついている。女の手がこの蓋にかかったとき「あら蜘蛛（くも）が」と云うて長い袖（そで）が横に靡（なび）く、二人の男は共に床（とこ）の方を見る。香炉に隣る白磁（はくじ）の瓶（へい）には蓮（はす）の花がさしてある。昨日（きのう）の雨を蓑（みの）

着て剪（き）りし人の情（なさ）けを床（とこ）に眺（なが）むる莟（つぼみ）は一輪、巻葉は二つ。その葉を去る三寸ばかりの上に、天井から白金（しろがね）の糸を長く引いて一匹の蜘蛛（くも）が——すこぶる雅（が）だ。

「蓮の葉に蜘蛛下（くだ）りけり香を焚（た）く」と吟じながら女一度に数弁（すうべん）を攫（つか）んで香炉の裏（うち）になげ込む。「蠨蛸（しょうしょう）懸（かかって）不揺（うごかず）、篆煙（てんえん）遶竹梁（ちくりょうをめぐる）」と誦（じゅ）して髯（ひげ）ある男も、見ているままで払わんともせぬ。蜘蛛も動かぬ。ただ風吹く毎に少しくゆれるのみである。

「夢の話しを蜘蛛もききに来たのだろ」と丸い男が笑うと、「そうじゃ夢に画（え）を活（い）かす話しじゃ。ききたくば蜘蛛も聞け」と膝の上なる詩集を読む気もなしに開

く。眼は文字（もじ）の上に落つれども瞳裏（とうり）に映ずるは詩の国の事か。夢の国の事か。

「百二十間の廻廊があって、百二十個の灯籠（とうろう）をつける。百二十間の廻廊に春の潮（うしお）が寄せて、百二十個の灯籠が春風（しゅんぷう）にまたたく、朧（おぼろ）の中、海の中には大きな華表（とりい）が浮かばれぬ巨人の化物（ばけもの）のごとくに立つ。……」

　折から烈（はげ）しき戸鈴（ベル）の響がして何者か門口（かどぐち）をあける。話し手ははたと話をやめる。残るはちょと居ずまいを直す。誰も這入（はい）って来た気色（けしき）はない。「隣だ」と髯（ひげ）なしが云う。やがて渋蛇（しぶじゃ）の目を開く音がして「また明晩」と若い女の声がする。「必ず」と答えたのは男らしい。

三人は無言のまま顔を見合せて微(かす)かに笑う。「あれは画じゃない、活きている」「あれを平面につづめればやはり画だ」「しかしあの声は？」「女は藤紫」「男は？」「そうさ」と判じかねて鬚が女の方を向く。女は「緋(ひ)」と賤(いや)しむごとく答える。

「百二十間の廻廊に二百三十五枚の額が懸(かか)って、その二百三十二枚目の額に画(か)いてある美人の……」

「声は黄色ですか茶色ですか」と女がきく。

「そんな単調な声じゃない。色には直(なお)せぬ声じゃや。強(し)いて云えば、ま、あなたのような声かな」

「ありがとう」と云う女の眼の中(うち)には憂をこめて笑の

光が漲ぎる。

　この時いずくよりか二疋の蟻が這い出して一疋は女の膝の上に攀じ上る。おそらくは戸迷いをしたものであろう。上がり詰めた上には獲物もなくて下り路をすら失うた。女は驚ろいた様もなく、うろうろする黒きものを、そと白き指で軽く払い落す。落されたる拍子に、はたと他の一疋と高麗縁の上で出逢う。しばらくは首と首を合せて何かささやき合えるようであったが、このたびは女の方へは向わず、古伊万里の菓子皿を端まで同行して、ここで右と左へ分れる。三人の眼は期せずして二疋の蟻の上に落つる。髯なき男がやがて云

う。

「八畳の座敷があって、三人の客が坐わる。一人の女の膝へ一疋の蟻が上る。一疋の蟻が上った美人の手は……」

「白い、蟻は黒い」と髯がつける。三人が斉（ひと）しく笑う。一疋の蟻は灰吹（はいふき）を上りつめて絶頂で何か思案している。残るは運よく菓子器の中で葛餅（くずもち）に邂逅（かいこう）して嬉しさの余りか、まごまごしている気合（けわい）だ。

「その画（え）にかいた美人が？」と女がまた話を戻す。

「波さえ音もなき朧月夜（おぼろづきよ）に、ふと影がさしたと思えばいつの間（ま）にか動き出す。長く連（つら）なる廻廊を飛ぶにもあ

らず、踏むにもあらず、ただ影のままにて動く」

「顔は」と髯なしが尋ねる時、再び東隣りの合奏が聞え出す。一曲は疾（と）くにやんで新たなる一曲を始めたと見える。あまり旨（うま）くはない。

「蜜を含んで針を吹く」と一人が評すると

「ビステキの化石を食わせるぞ」と一人が云う。

「造り花なら蘭麝（らんじゃ）でも焚（た）き込めばなるまい」これは女の申し分だ。三人が三様（さんよう）の解釈をしたが、三様共すこぶる解しにくい。

「珊瑚（さんご）の枝は海の底、薬を飲んで毒を吐く軽薄の児（じ）」と言いかけて吾に帰りたる髯が「それそれ。合奏より

夢の続きが肝心じゃ。——画から抜けだした女の顔は……」とばかりで口ごもる。

「描けども成らず、描けども成らず」と丸き男は調子をとりて軽く銀椀を叩く。葛餅を獲たる蟻はこの響きに度を失して菓子椀の中を右左りへ馳け廻る。

「蟻の夢が醒めました」と女は夢を語る人に向って云う。

「蟻の夢は葛餅か」と相手は高からぬほどに笑う。

「抜け出ぬか、抜け出ぬか」としきりに菓子器を叩くは丸い男である。

「画から女が抜け出るより、あなたが画になる方が、

やさしゅう御座んしょ」と女はまた髯にきく。
「それは気がつかなんだ、今度からは、こちが画になりましょ」と男は平気で答える。
「蟻も葛餅にさえなれば、こんなに狼狽(うろた)えんでも済む事を」と丸い男は椀をうつ事をやめて、いつの間にやら葉巻を鷹揚(おうよう)にふかしている。
五月雨(さみだれ)に四尺伸びたる女竹(めだけ)の、手水鉢(ちょうずばち)の上に蔽(おお)い重なりて、余れる一二本は高く軒に逼(せま)れば、風誘うたびに戸袋をすって椽(えん)の上にもはらはらと所択(えら)ばず緑りを滴(したた)らす。「あすこに画がある」と葉巻の煙をぷっとそなたへ吹きやる。

床柱に懸けたる払子の先には焚き残る香の煙りが染み込んで、軸は若冲の蘆雁と見える。雁の数は七十三羽、蘆は固より数えがたい。籠ランプの灯を浅く受けて、深さ三尺の床なれば、古き画のそれと見分けのつかぬところに、あからさまならぬ趣がある。「ここにも画が出来る」と柱に靠れる人が振り向きながら眺める。

女は洗えるままの黒髪を肩に流して、丸張りの絹団扇を軽く揺がせば、折々は鬢のあたりに、そよと乱るる雲の影、収まれば淡き眉の常よりもなお晴れやかに見える。桜の花を砕いて織り込める頬の色に、春

の夜の星を宿せる眼を涼しく見張りて「私(わたし)も画(え)になりましょか」と云う。はきと分らねど白地に葛(くず)の葉を一面に崩して染め抜きたる浴衣(ゆかた)の襟(えり)をここぞと正せば、暖かき大理石にて刻(きざ)めるごとき頸筋(くびすじ)が際立(きわだ)ちて男の心を惹(ひ)く。

「そのまま、そのまま、そのままが名画じゃ」と一人が云うと

「動くと画が崩れます」と一人が注意する。

「画になるのもやはり骨が折れます」と女は二人の眼を嬉しがらしょうともせず、膝に乗せた右手をいきなり後(うし)ろへ廻(ま)わして体をどうと斜めに反(そ)らす。丈(たけ)長き黒

髪がきらりと灯（ひ）を受けて、さらさらと青畳に障（さわ）る音さえ聞える。

「南無三、好事（こうず）魔多し」と髯ある人が軽（かろ）く膝頭を打つ。

「刹那（せつな）に千金を惜しまず」と髯なき人が葉巻の飲（の）み殻（がら）を庭先へ抛（たた）きつける。隣りの合奏はいつしかやんで、樋（ひ）を伝う雨点（うてん）の音のみが高く響く。蚊遣火（かやりび）はいつの間（ま）にやら消えた。

「夜もだいぶ更（ふ）けた」

「ほととぎすも鳴かぬ」

「寝ましょか」

夢の話しはつい中途で流れた。三人は思い思いに

臥床に入る。

三十分の後彼らは美くしき多くの人の……と云う句も忘れた。ククーと云う声も忘れた。蜜を含んで針を吹く隣りの合奏も忘れた、蟻の灰吹を攀じ上った事も、蓮の葉に下りた蜘蛛の事も忘れた。彼らはようやく太平に入る。

すべてを忘れ尽したる後女はわがうつくしき眼と、うつくしき髪の主である事を忘れた。一人の男は髯のある事を忘れた。他の一人は髯のない事を忘れた。彼らはますます太平である。

昔し阿修羅が帝釈天と戦って敗れたときは、八万

四千の眷属を領して藕糸孔中に入って蔵れたとある。維摩が方丈の室に法を聴ける大衆は千か万かその数を忘れた。胡桃の裏に潜んで、われを尽大千世界の王とも思わんとはハムレットの述懐と記憶する。粟粒芥顆のうちに蒼天もある、大地もある。一世師に問うて云う、分子は箸でつまめるものですかと。分子はしばらく措く。天下は箸の端にかかるのみならず、一たび掛け得れば、いつでも胃の中に収まるべきものである。

また思う百年は一年のごとく、一年は一刻のごとし。一刻を知ればまさに人生を知る。日は東より出でて必ず西に入る。月は盈つればかくる。いたずらに指を屈

して白頭に到(いた)るものは、いたずらに茫々(ぼうぼう)たる時に身神を限らるるを恨(うら)むに過ぎぬ。日月は欺(あざむ)くとも己れを欺くは智者とは云われまい。一刻に一刻を加うれば二刻と殖(ふ)えるのみじゃ。蜀川(しょくせん)十様の錦、花を添えて、いくばくの色をか変ぜん。

八畳の座敷に髯のある人と、髯のない人と、涼しき眼の女が会して、かくのごとく一夜(いちや)を過した。彼らの一夜を描(えが)いたのは彼らの生涯(しょうがい)を描いたのである。

なぜ三人が落ち合った？　それは知らぬ。三人はいかなる身分と素性(すじょう)と性格を有する？　それも分らぬ。三人の言語動作を通じて一貫した事件が発展せぬ？

人生を書いたので小説をかいたのでないから仕方がない。なぜ三人とも一時に寝た？　三人とも一時に眠くなったからである。

（三十八年七月二十六日）

底本：「夏目漱石全集2」ちくま文庫、筑摩書房
　１９８７（昭和62）年10月27日第1刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房
　１９７１（昭和46）年４月～１９７２（昭和47）年１月
※底本本文では、「蠨蛸（しょうしょう）」は、「虫＋嘯のつくり」とつくってある。しかし、底本の注記では、つくりにくさかんむりのある「蠨」が用いられている。下記の異本とも照合の上、当該の箇所は「※［＃「虫＋（くさかんむり／嘯のつくり）」で入力した。
　「倫敦塔・幻影の盾」岩波文庫、岩波書店

１９３０（昭和５）年12月20日第１刷発行
１９９０（平成２）年４月16日第23刷改版発行
１９９７（平成９）年９月５日第30刷発行
「倫敦塔・幻影の盾」新潮文庫、新潮社
１９５２（昭和27）年７月10日初版発行
１９６８（昭和43）年９月15日20刷改版発行
１９９７（平成９）年４月25日69刷発行
入力：柴田卓治
校正：LUNA CAT
２０００年９月11日公開
２００４年２月26日修正

青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。